

韓国人日本語学習者における多義動詞の習得 — 典型性と転移可能性の観点から —

薛惠善 (ソル・ヘソン)

名古屋大学大学院国際言語文化研究科 日本語教育学講座 博士後期課程

realsunsg@gmail.com

1. はじめに

1.1 研究背景

第二言語学習者の中間言語においては、母語 (L1) と目標言語 (L2) の言語的差異によるものだとは思えないものがしばしば見られる。つまり、L1 と L2 が対応しているような場合にも誤用あるいは回避が見られたり、一方、言語的な差異が存在し、誤用が起こってもおかしくない場合にも誤用がさほど見られなかったりするのである。このような事例を見ると、学習者の誤用は概ね、L1 の用法が L2 の対応項目にも同じように存在する、もしくは存在しないという学習者自身の認識に影響されるものであると思われる。本研究では、心理言語的類型論 (psychotypology) という母語と目標言語の心理言語的距離、また、母語の項目に対し感じる有標性 (psycholinguistic markedness) により転移の可能性を予測し、第二言語習得研究において母語の影響という側面に改めて光を当てた Kellerman (1978) の枠組みに基づき、母語の語彙項目に対する学習者内部の心理言語学的な認識に着目し、言語転移の可能性について探る。

1.2 先行研究と本研究の目的

Kellerman(1978, 1979)ではオランダ人英語学習者に英語の Break に対応する L1 Breken を含む L1 の文章を与え、英語で対訳が可能かを判断させ、その結果から L1 項目に対し学習者が感じるプロトタイプ性¹⁾が高いほどL1転移が起こりやすいとした。Kellermanの転移可能性理論に基づいたL2日本語の習得研究である加藤(2005)では、中国語話者を対象に「开 (開ける/開く)」と「看 (見る)」を用いて中国語母語話者にはそれら多義動詞の典型度判断テストを、学習者には日本語の正誤判断テストと発話テストを行った。学習者の転移率(L1の用法を容認した割合)とL1項目の典型度間の相関を調査し、その結果として受容面ではL1項目の各用法における典型度とL1転移の可能性には相関が見られず、産出面では相関が見られるとした。しかしKellerman(1978, 1979)では、ほとんど英語で言える項目だけを使用し、L2で言えない項目に対しては調査を行っていないことと、加藤(2005)では学習者の習熟度が考慮されておらず、日本語に存在する用法と存在しない用法を分けた分析を行っていないという問題点が残されていた。そこで本研究では、言語間の距離が日本語により近いとされる韓国語話者を対象とし、韓国語の多義語「열다[yelta](アク/アケル/ヒラク)」と「보다[pota](ミル)」を用いて学習者が有するL1のプロトタイプがL2多義語の習得に

影響を及ぼすか、また、L1 に存在するが L2 には存在しない用法は習得が困難なのかを習熟度の影響を考慮して検証し、どのような場合に転移が起こり、どのような場合には起こらないかという L1 の転移可能性について探ることを目的とする。

2. 研究課題

- 2.1. L1 の転移は、学習者が L1 項目に対して感じる典型度が高いほど生じやすいか。
- 2.2. L2 多義動詞を習得する際、L1 と同じ用法が L2 に存在するかが転移可能性に影響するか。
- 2.3. 学習者の習熟度は、L2 多義動詞の習得における転移可能性にどのように影響するか。

なお、多義動詞の習得における転移可能性は L1 対応項目のプロトタイプ性に影響されるという先行研究の結果や、習熟度の上昇とともに正しい L2 の知識を得ることによって、知識の再構築が起こり、正しい L2 運用につながる(加藤 2005)ことを考慮し、次のような仮説を立てた。

仮説 1. L1 用法の典型度が高いほど、L2 への転移可能性も高くなる。

仮説 2. L2 には存在しない L1 用法であっても、学習者は転移を行う。

仮説 3. 学習者は L2 多義動詞の習得において L1 の影響を受けるが、習熟度が上がるにつれ、L2 には存在しない用法に対する L1 の転移はなくなっていく。

3. 本調査

3.1. 典型度調査

3.1.1. 実施方法

典型度調査は、調査用のウェブページを設けて韓国在住の韓国語母語話者 56 名を対象に実施した。複数の文脈を提示し、それらの文中の *yelta* と *pota* が、どれほど典型的であると思うかを 1 (全然典型的ではない) ~9 (非常に典型的である) の数値で直感的に判定するように求めた。なお、得られた調査結果を各用法の平均値を基準とし、典型度高・低に分類した(表 1)。

3.1.2. 結果

表 1 典型度調査で用いた調査項目と L1 典型度の高低

L1 典型度	열다 【yelta】	보다 【pota】
高	창문을 열다 (窓を開ける)	TV 를 보다 (テレビを見る)
	약국이 열다 (薬局が開く)	책을 보다 (?本を見る(読む)) ²⁾
	입을 열다 (口を開ける)	영희와 보다 (*花子と見る(会う))
	마음을 열다 (心を開く)	날씨를 보다 (天気を見る)
低	가게를 열다 (お店を開く)	시험을 보다 (*試験を見た(受けた))

	파티를 열다 (パーティーを開く)	아이를 보다 (子どもを見る)
	회의를 열다 (会議を開く)	만만하게 보다 (甘く見る)
		사회를 보다 (*司会を見る)

3.2. 発話テスト

3.2.1. 調査対象と実施方法

発話テストは、韓国の大学で日本語学科の専門の授業に参加している学部 2~4 年生の学習者 35 名(下位 18, 上位 17 名³⁾)を対象とし、典型度調査で用いた文を日本語訳した文を使用して作成した調査項目 15 文とフィラー 15 文の合計 30 問で構成された。30 枚の絵を与え、それを描写した文の中の括弧を口頭で埋める方法で行われ、最大 10 秒以内に即時回答するように求めた。統制群として日本語母語話者 22 名にも同じ調査を行った。

3.2.2. 結果

分散分析の結果、学習者のアク/アケル/ヒラクの使用率には典型度の有意な影響が見られた($F(1,33)=62.140$, $p<.001$)。使用率に学習者の習熟度の有意な影響は見られなかった($F(1,33)=.135$, $p=.716$)。ミルの使用率と典型度の有意な影響見られ($F(1,33)=65.450$, $p<.001$)、L2 に L1 の用法が存在するか否かが使用率に有意に影響し($F(1,33)=360.610$, $p<.001$)、習熟度の異なる両群間の有意な差も認められた($F(1,33)=5.401$, $p=.026$)。発話テストを通しては、アク/アケル/ヒラクとミルの産出において、yelta と pota の用法の典型度の高いものは低いものに比べて転移しやすいことと、L1-L2 に共通して存在する用法を、上位群の学習者の方がより転移させていたことが明らかになった。

3.3. 正誤判断テスト

3.3.1. 調査対象と実施方法

正誤判断テストは、典型度調査で用いた文を日本語訳した文で、調査項目 15 文とフィラー 40 文の合計 55 問で構成韓国の大学で日本語学科の専門の授業を受講する学部 2~4 年生の学習者 64 名(下位 30, 上位 34 名)を対象とし、文中で使われた「アク/アケル/ヒラク」と「ミル」の正誤を○・×で判断させる方法で行われた。統制群として日本語母語話者 40 名にも同じ調査を行った。

3.3.2. 結果

分散分析の結果、学習者におけるアク/アケル/ヒラクの容認率には典型度の有意な影響が見られず($F(1,62)=1.733$, $p=.193$)、上位と下位群の有意な差も見られなかった($F(1,62)=.409$, $p=.525$)。ミル容認率に関しては、典型度の影響が認められ($F(1,62)=15.920$, $p<.001$)、L2 にお

ける L1 用法の存在有無が容認率に有意に影響した ($F(1,62)=92.723, p<.001$)。上位と下位群の容認率の有意な差も認められた($F(1,62)=6.960, p=.011$)。このように、アク/アケル/ヒラクの正誤判断テストの結果では、典型度が高い項目が転移されやすいわけではなく、学習者の習熟度を問わず同じ転移のパターンを見せた一方、L2 に存在しない用法が L1 に存在するミルの場合、典型度が高い項目がより転移されやすく、下位群の学習者の方が L2 に存在しない用法に対して上位群より多く転移を行っていたことが分かった。

4. 結論と今後の課題

本研究では、韓国人日本語学習者を対象に多義動詞を習得する際の L1 の用法の典型度と L1 と L2 用法のズレ、そして習熟度の影響を検討した。調査を通じて L1 の用法の典型度が高い用法ほど転移されやすく、L1 にしか存在しない用法においても転移が起こりやすいということが明らかになったが、本研究で対象としたアク/アケル/ヒラクは、厳密には自他によりどれを用いるかが異なってくる点で、意味面で多義であるかは疑問が残る。そこで、何を多義語として扱うかに関してはより洗練された基準が必要であると思われる。また本研究では扱っていない日本語母語話者の L2 用法に対する典型度や学習者の L2 用法に対する典型度の間にはどのような関係があるかを調べると、学習者が有する L2 動詞の意味構造がより明らかに見えてくるとと思われる。なお、結果として得られた典型度の影響がどの言語話者においても当てはまるとは言えないため、他の言語を母語とする学習者と比較を行うことが必要であると言えよう。

注

- 1) Kellerman (1978) は、「coreness」という用語を用いている。Kellerman のいう中心的 (core) な意味、及び中心性とは、最も普遍的で、無標 (unmarked) であり、辞書の編纂者や一般の人がある語の定義であるとする意味である (Kellerman 1978 ; 1979)。Kellerman(1995)では、Kellerman 自身もこの概念について典型性 (prototypicality) という語を用いているため、本研究では、中心性、典型性、プロトタイプ性を全て同義であると定義する。
- 2) 蔭のかかっているところは、日本語には存在しない用法であることを表す。
- 3) 学習者の習熟度の判定には、SPOT (Ver.2)を使用した。

参考文献

- 加藤稔人 (2005). 「中国語母語話者による日本語の語彙習得—プロトタイプ理論、言語転移理論の観点から—」『第二言語としての日本語の習得研究』 8号, 5-23.
- Kellerman, E. (1978). Giving Learners a Break: Native Language Intuitions as a Source of Predictions about Transferability. *Working Papers on Bilingualism*, No. 15. pp. 59-92.
- _____ (1979). Transfer and non-transfer: where we are now, *Studies in Second Language Acquisition* 2, 37-57.